

無装飾から超装飾へ

高安啓介

大阪大学大学院文学研究科

私たちの身の回りには多くの装飾があふれており、装飾から逃れられない現実がある。こうした状況のもとでは、昔の工芸家のように装飾賛美にまわっても、近代主義者よろしく装飾批判をおこなっても、現実にはあまり響かない。そこで二者択一の思考から逃れるため、超装飾という耳慣れない語をもちいてはどうだろう。この語をもちいる必然を感じ取ってもらうには、現代にいたる経緯をみなければならぬ。あくまで便宜上の区分だが、デザインの歴史はおおきく三段階に分けられる。19世紀後半、工業化による生活環境の悪化にたいして「装飾」が見直された段階。20世紀前半、工業社会に適合するために「無装飾」が見出された段階。20世紀後半、脱工業化にともなう自由な発想の重視によって「超装飾」が展開する段階。ただしこう見るとき、二つ目の段階には注意がいる。近代デザインは無装飾によって知られるが、装飾の代替として素材がもちいられたり、装飾の代替として色彩がもちいられたり、装飾への欲求はけっして絶え果てたわけでないからである。装飾はいつの時代でも健在であり、現在もそれは変わらない。

私たちの世界に生気をあたえているのは装飾だけではない。超装飾という類型をここに措定したい。超装飾とは、本体のまわりに装飾をまとうせるのではなく、本体そのものが躍動している場合をいう。超装飾は、表面上のみせかけにすぎない装飾の欠点を克服しながら、近代デザインに指摘される生気のなさからも脱している。超装飾は、表面を覆う装飾ではないが、本体のうちに装飾の精神を宿しており、装飾の働きをすべて満たしている。超装飾はすなわち、美しく見せる働き、生気づける働き、何かを伝える働き、これらすべての働きを自己の性格として保っており、装飾を引き継ぎながら装飾を超える何かである。

1980年代以降あらわれた脱構築建築はとくに自由奔放な形態にうったえる点で、超装飾のモデルである。脱構築建築として分類されるハイテク建築は、一九二〇年代の近代主義において夢想された奇想天外なかたちをコンピュータの解析技術によって現実化してきた。一つの源泉として表現主義があり、一つの源泉として構成主義があり、脱構築建築はこれら近代の未完のプロジェクトを三次元に実現した。スペインのビルバオにあるグッゲンハイム美術館ビルバオ分館は、脱工業社会における超装飾のありようも物語っている。建築家ゲーリーは魚にまつわる自分の原体験を語りたがるが、一個人の体験がこうした巨大建築として現れてよいのか。結果として得られた形態について後から何とでも理由づけできようが、自由な形態なほど本当にそれである理由を言うのはむづかしい。

超装飾について長所とともに短所もみえてきた。超装飾は、装飾という付け足しではなく自己それ自体の存在となるとともに、無装飾の生気のなさにたいしては躍動感をえている。けれども、超装飾は

いきおい個人の気まぐれな形態に陥りやすく、一種の擬態として偽りの性格をとどめる。装飾がもともと本体にまわりつく虚像だったなら、超装飾はややもすると本体そのものを虚像にしてしまう。超装飾もつ躍動感はそもそも擬態からなるのであり、擬態こそ自己の本質とみたほうがよい。建築であれ、製品であれ、衣服であれ、自己を偽っても、自然の律動に共振したり、社会の理想に共鳴したり、目に見えない何か異なるものに似ようとしてかまわない。もともとそうしたすべては、真摯な工芸家たちが装飾によって目指していたのではないか。超装飾はそれを表面だけでなく本体にもしみわたらせる試みにほかならない。